

科学研究費助成事業（特別推進研究）研究進捗評価

課題番号	16H06283	研究期間	平成28(2016)年度 ～令和2(2020)年度
研究課題名	言語と利他性の霊長類的基盤		
研究代表者名 (所属・職)	松沢 哲郎（京都大学・高等研究院・特別教授）		

評価基準（該当欄に○等の印を付け、意見を記入してください。）

該当欄		評価基準
	A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(評価意見)

本研究は、人間の本性の進化的起源を明らかにするために、人間の近縁であるチンパンジー2種とその外群としてのオランウータンなどを研究対象として、野外研究と実験研究を組み合わせた「比較認知科学」の手法により、言語と利他性に焦点をあてた研究を推進するものである。

本研究期間中に、①チンパンジーが協力して課題遂行できる一方で互恵的な利他行動は困難であることを示唆する実験研究や、②チンパンジーの視線検出によって他者の心を理解することを実証した研究など、すでに多数の研究成果が発表された。また、研究代表者だけではなく、若手研究者も含め研究組織全体で多くの研究成果が上がっている点も高く評価できる。

一方、ゲノム研究や「ウマ学」の提唱など、当初の研究計画を超えて、研究関心が広がっているものの、それらの広範な研究関心が、有機的に「言語と利他性」の問題へと結合しているとは現状では言い難く、特にウマ学は研究上の必要性を認めることができない。また、霊長類は他者や概念を扱いうる「言語」を有しているのかといった実証研究については、「利他性」の問題に関わる研究に比して得られた成果が少ないことから、今後さらに深めていくことが期待される。

なお、すでに多くの研究成果が発表されており、研究全体として順調に進展していると判断する。